



メノウ王国 常陸大宮

常陸大宮市では、諸沢地区で白色を帯びた透明、玉川流域で赤色や灰白色のメノウ（瑪瑙）が産することがよく知られています。メノウは、水晶や石英と同じ珪酸を成分とする鉱物ですが、水晶のように結晶せずに繊維状の構造であるため、硬くて粘りのあるのが特徴です。当市におけるメノウ使用の歴史をみていきましょう。

旧石器時代では、約3万年前の野上^{つぎぬき} 槻^{せきじん} 遺跡でメノウ製のナイフ形石器や石刃（石の刃物）が採集されています。当市では、これ以降メノウが使用されるようになります。

縄文時代晩期には、小野天神前遺跡でメノウの石鏃^{せきぞく}（矢じり）が大量に作られました。メノウは薄く割るのが難しいのですが、300℃ほどで数時間加熱すると水晶や黒曜石と同様なガラス質に変質し加工が容易になります。同時に、独特の乳白



▲小野天神前遺跡のメノウ製石鏃
（渡邊 明氏 寄贈資料）



中村 信博 氏
考古部会協力員
（茂木町ふみの森もてぎ図書館
埋蔵文化財専門員）

色の美しい艶が出るのも特徴で、当遺跡の縄文人はこの技術を習得していたのです。北関東では、縄文時代を通して石鏃石材にチャートが主体的に用いられてきましたが、約3,200～2,500年前にあたる後期後葉～晩期の時期、当市から栃木県茂木町にかけてのエリアでは、このようなメノウ製の石鏃がチャート製を凌駕して作られ、周辺地域に流通していたことがわかってきました。その理由としては、縄文人がこの独特の優美さを珍重したからと考えられます。

北関東の古墳からよく出土する勾玉^{まがたま}は、赤色のメノウ製であることから多くが玉川産と考えられています。江戸時代になると、諸沢地区では火打石としてメノウが採掘され、江戸で流通していた火打石のほとんどが当地産だったといわれています。その後は、昭和の中頃までガラスの原料として採掘されていました。

以上のように、当市には3万年にわたるメノウ使用の歴史があり、特に縄文時代晩期、古墳時代、江戸時代では社会にはたした役割が大きいことからメノウ王国と呼んでも良いのではないのでしょうか。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）